

ふるさと米子 探検隊

2008年 3月 27日

第12号 大山入門 歴史編 の巻



編／発行 米子市立図書館 Tel0859-22-2612 Fax0859-22-2637 <http://www.yonago-toshokan.jp>

大山の歴史ものがたり



米子市内から見える大山は、山の形がとても美しく見えるため、むかしから「伯耆富士」（ほうきふじ）と呼ばれていました。また多くの人から、信仰の山としてとても大切にされてきました。大山の中腹（ちゅうふく）には大山町大山寺という部落があり、大神山（おおがみやま）神社奥宮、大山寺（だいせんじ）本堂、阿弥陀堂（あみだどう）の建物や、お地蔵様など、探検隊 11 号で学んだ石造物もたくさんあります。いまは神社とお寺に分かれています、明治時代になるまでは「大山寺」というとても大きなお寺でした。12 号の探検隊では地名

や仏様の名前など、むずかしい漢字がたくさん出できます。みんなもいろいろな本を調べて、大山歴史探検に挑戦してみよう！

探検隊の参考資料

『大山探訪 自然へ愛をこめて』清水谷登／編 中国新聞社 1991 Y29/S33

『大山 その自然と歴史』山陽新聞社／編 山陽新聞社 1992 Y29/S36-2

『鳥取県歴史の道調査報告書 第十集 大山道』鳥取県教育委員会文化課／編

鳥取県教育委員会 1991 Y290/T24-2/10

『郷土史跡めぐり 西伯耆編』鳥取県立米子図書館／編 今井書店 1980 Y29/T6-4

『大山の自然と歴史のこえ』伊田弘實／著 鳥取県観光連盟 1982 0929/I8/2

『大山とその周辺 鳥取県の自然と歴史』鳥取県立博物館／編刊 1981 0906/T3

『大山歴史散歩』下村章雄／著 米子市立山陰歴史館 1965 09223/S4-2

②

「だいせんさん」

江戸時代の終わりまで、大山寺はとても有名で大きなお寺でした。本尊(ほんぞん)は地蔵菩薩(じぞうぼさつ)と大国主命(おおくにぬしのみこと)がいつしよになった、大智明権現(だいちみょうごんげん)がまつってありました。地蔵菩薩は人々の暮らしを助け、死んだ人を極楽(ごくらく)につれて行ってくださるエライ仏様です。とくに岡山県の人たちには、大山に行けば死んだ人に会うことができる、という信仰がありました。江戸時代には、地蔵様は牛や馬の守り神ということで、大山博労座(だいせんぼくろうざ)では牛馬市が開かれてにぎわいました。

田植え地蔵

備後国(びんごのくに、今の広島県)神石(じんせき)というところに、地蔵を深く信じる人がいて、日ごろから生きた地蔵様に会いたいと思っていました。その人が、下野の岩舟(しもつけ・いわふね 今の栃木県)に行けば会うことができる、という夢をみました。岩舟に行くと、古いお寺にお坊様が一人いて、泊めてもらうことにしました。すると村の人が来て「あすの田植えを手伝ってください」といふと、お坊様は「承知(しょうち)しました」といいました。やがてまた村人が来て「あすの田植えを手伝ってください」といふとこれもまた「承知しました」。そしてまた別の村人がやって来て「あすの田植えを手伝ってください」といいました。お坊様はこれもまた「承知しました」という返事。一人で三か所からのお願いを受けたので、神石から来た人は不思議に思い、つぎの日に田植えを見に行きました。するとたのまれた三か所でお坊様が働いていましたのでこれこそ生きたお地蔵様だと思い、お坊様にさういふと、お坊様は「大山に本当の生きた地蔵様がおられます。早く大山に行き、本当の地蔵様を拝(おが)みなさい」と言われたそうです。

これは「大山寺縁起絵巻」という、室町時代(むろまちじだい)に作られた絵と文章で大山寺のことを書いた絵巻物に書いてあるお話しです。日野郡や備後地方には、田植え歌に「だいせんさん」を唄ったものがあります。



『大山寺縁起』 稲葉書房より

大山寺と僧兵

平安時代(794~1185)には、大山寺は多くの荘園(しょうえん・領地のこと)を持っていました。僧の人数も多く、僧の住む子院(こいん)は三つのグループに分かれていました。

阿弥陀堂(あみだどう)を中心としたグループは西明院(さいみょういん)とよび、大日堂(たいにちどう)を中心とするグループは中門院(ちゅうもんいん)、釈迦堂(しゃかどう)を中心とするグループは南光院(なんこういん)と呼ばれ、江戸時代にはそれぞれのグループが14もの子院を持っていたといえます。今はほとんど無くなってしまいましたが、洞明院、円流院などが残っています。これらの中心に本社(今の大神山神社奥宮)がありました。

これらのグループには、僧でありながら武器を持つ者もいて、僧兵(そうへい)と呼ばれ、たがいに争ったり、自分たちのわがままを押し通そうとしたりしました。1094年には大山寺の僧兵が、神輿(みこし)をかついで京都まで出かけ、天皇へ訴えごとをしています。1115年には南光院と中門院のグループが鐘のことで争いましたし、1168年には中門院と西明院のグループが三徳山(みとくさん)に押しかけ、寺を焼き討ちしたりしました。

江戸時代の大山寺

1601年、駿河国府中(するがのくに・ふちゅう、今の静岡市)から米子城主としてやってきた中村伯耆守忠一(ほうきのかみただかず)によって、大山寺は寺領を取り上げられてしまいました。しかし豪円和尚の活躍で、3000石の土地を幕府に認めてもらい、鳥取藩の支配のおよばない寺領としてもらうことができました。右の写真は、淀江の出身といわれる豪円(ごうえん)の石造です。戦国の時代、京都の比叡山で修行してから、備前国金山寺(びぜんのかみさん 今の岡山県)に入り、この寺をりっぱなお寺にしました。比叡山の再建にも活躍した豪円は、1594年、大山寺座主(ざす)となり、衰えていた大山寺を盛り返し、りっぱなお寺に再建しました。豪円地蔵は、大山寺境内にある、もっとも古く、一番大きな地蔵だと言われています。豪円の活躍がいかに大きかったかをいまに伝える石造です。



豪円地蔵

④

大 山 道

いろいろな地方から大山にお参りする道を「大山道」と言いました。大山道は、信仰のために大山に行く人や、牛馬の売り買いの人々が通る道でした。

① 尾高道

米子からは、尾高を通り、赤松の部落を通る道でしたが、いまは大山道路というりっぱな道がついています。この道は、松江や出雲の方から来る人々も通りました。

江戸時代のおわりごろ、岸本町から登ってくる丸山道と合流するあたりに「分けの茶屋」ができました。大山町から博労座に向かう道すじには、目印のために置かれた「一町地蔵」を見ることができます。

大山道路の道にそって、今でも大きな黒松があります。この松は豪円が雪のつもる冬でも、道にまよわないようにするため植えさせたと言われています。

② 坊領道

大山町方面から、阿弥陀川(あみだがわ)にそって登り、坊領(ぼうりょう)を通り、博労座へとつづく道です。江戸時代は、鳥取藩の殿様の住んでいた鳥取と大山寺をむすぶ大事な道でした。

③ 川床道

大山の東側、関金町や日本海側の琴浦町方面から大山に登る道です。二つの道は川床(かわどこ)で合流し、博労座へとつづきます。

④ 横手道

大山の西側をぐるりとまわる道です。美作(みまさか・岡山県)方面から江府町御机(みつくえ)を通り、大山の真ん中を横断して、大山寺西側入口の石の大鳥居へ出る道です。江尾(えび)や溝口(みぞくち)からの道もこの横手道につながっています。

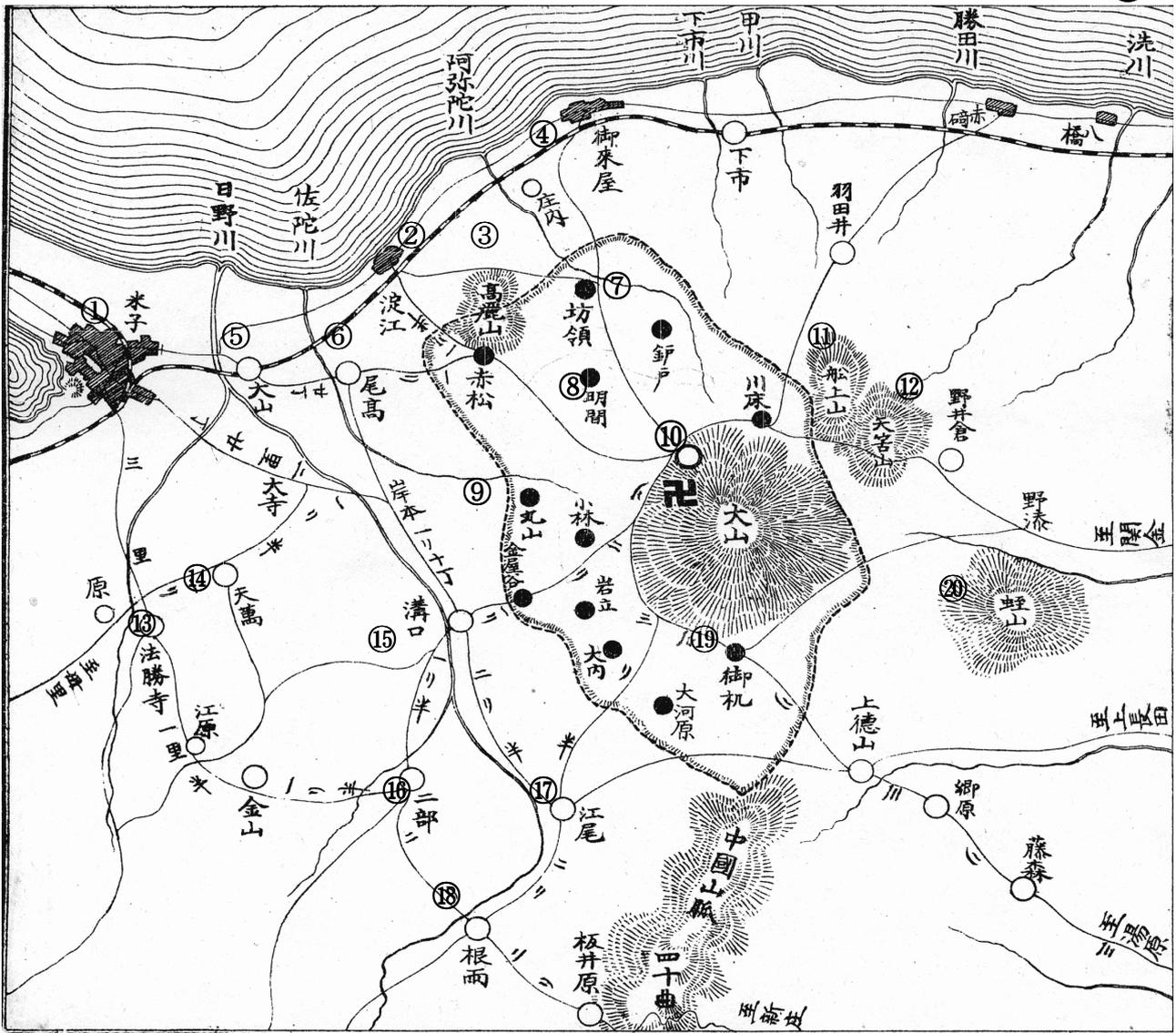


川床道の鳥栖佐摩明王像

(うすさまみょうおう)



横手道の六地藏



この大山道の地図は、1912(明治45)年、大山寺でつくられた『伯耆の大山』という本にのっている地図です。むかしの大山道をわかりやすく描いています。数字を追いかけて、**地名の読み方を勉強してみよう!**

- ① 米子(よなご) ② 淀江(よどえ) ③ 高麗山(孝霊山 こうれいさん)
- ④ 御来屋(みくりや) ⑤ 大山(だいせん 今の伯耆大山駅) ⑥ 尾高(おだか)
- ⑦ 坊領(ぼうりょう) ⑧ 明間(あけま) ⑨ 丸山(まるやま)
- ⑩ 大山寺(だいせんじ) ⑪ 船上山(せんじょうさん) ⑫ 矢筈山(やはずがせん)
- ⑬ 法勝寺(ほっしょうじ) ⑭ 天萬(天万 てま) ⑮ 溝口(みぞくち)
- ⑯ 二部(にぶ) ⑰ 江尾(えび) ⑱ 根雨(ねう)
- ⑲ 御机(みつくえ) ⑳ 蛭山(蒜山 ひるぜん)

大山道には、道ばたの大きな木の下や草のかげに、地蔵様がまつてあります。道がわかる場所には道標(みちしるべ)があります。**調べてみよう!**

⑥

大山の天狗

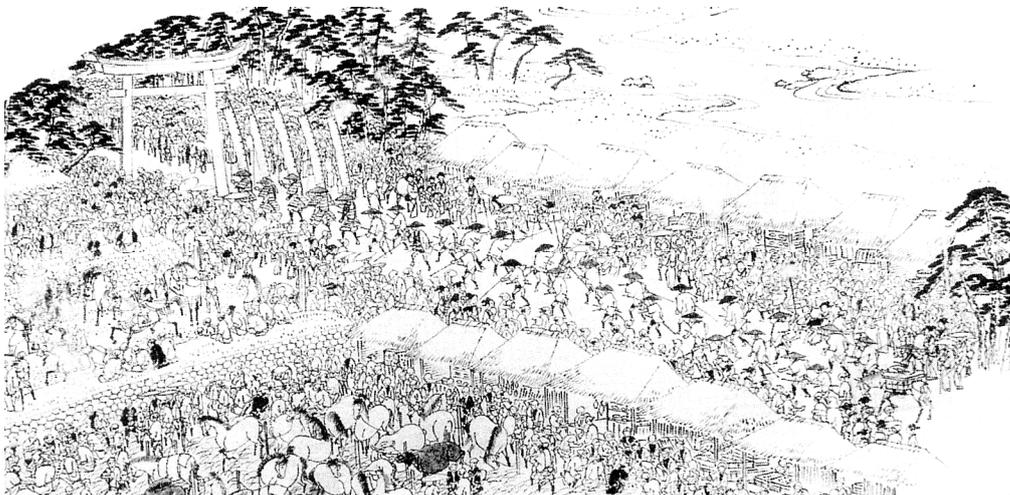


大山の天狗は伯耆坊(ほうきぼう)と呼ばれ、天狗番付(てんぐばんづけ・人気ランキングのこと)では、西の大関になっています。大納言(だいなごん)といういたずら好きの小坊主が、大山天狗にこらしめられて、高い杉のてっぺんにしばりつけられた話しが伝わっています。今でも大納言杉と呼ばれる木があります。鳥取県の西部には、大山の天狗が一休みしたと言われる「天狗松」がいくつかありました。この天狗は、山野を駆けめぐって修行した修験者(しゅげんしゃ)のことではないかと言われています。

博労座の牛馬市

いまの大山自然歴史館の建物の下にある駐車場は、博労座(ばくろうざ)といって、牛馬市で有名だったところです。

江戸時代のなかごろの 1726 年、江府町大河原の吉川右平太(きっかわうへいた)という人が、大山の地蔵菩薩は牛馬の守り神だから、大山寺の祭りの日に、牛馬市を開かせてくれるようお願いしました。願いは聞き届けられ、大山寺がこれを管理することになりました。4月24日の祭りの日には、伯耆・因幡(鳥取県)、美作(みまさか)・備中・備前(岡山県)、備後(広島県)、出雲・石見(島根県)などから、おおぜいの博労(ばくろう、牛馬の売り買いをする人)たちが、たくさんの牛馬を連れてやって来たといえます。それを目当ての屋台なども出て、たいへんなにぎわいだったそうです。しかし、この牛馬市も、1931年、大山が国立公園になる時に中止となりました。



広重画「大山博労座牛馬市図」の部分

むずかしいけど 大事なポイント 2つ



その1 神仏習合(しんぶつしゅうごう)

仏教が朝鮮半島(ちょうせんはんとう)の百済(くだら)という国から伝わったのは、552年(538年という説もある)のことです。仏教のような大きな宗教は、国から国へと伝わるうちに、それぞれの国にある信仰と合体して、形をかえて行きました。日本では、神道(しんと)としだいに交じり合います。奈良時代には(710~794年)、神社の中に神宮寺を作ることがはやりました。また後には、寺院に関係のある神様を寺院の守護神(しゅごしん)として大切にするようになりました。神様と仏様のどちらがエライか、ということがしんけんに議論されたりしました。

大山寺の大きな特徴は、仏教と神道の交じり合う歴史をよく伝えているところです。天台宗角磐山(てんだいしゅうかくばんさん)大山寺にまつてある大智明権現は、神様? 仏様? さあみんなで調べてみよう!



その2 廃仏毀釈(はいぶつきしゃく)

江戸時代が終わり、明治時代が始まると、政府は次々と新しい命令を出しました。1868年の「神仏分離令」(しんぶつぶんりれい)もその一つです。太政官(だじょうかん)というところから出されたこの命令は、神道を国の宗教に決めたので、神様と仏様の両方の特徴を持つものを禁止する、という内容でした。神社のなかから、仏教のにおいのするものを追い出してしまえ、というこの命令のために、日本国内のお寺は大混乱になりました。1875年(明治8)、大山寺は寺号廃絶(じごうはいぜつ)、大山寺本社はこの時から、大神山神社奥宮(おおがみやまじんじゃおくのみや)となりました。米子市尾高にある大神山神社が、ここの本社とされました。廃仏毀釈によって、長い間さかえて来た大山寺の信仰の歴史も終わりとなりました。多くのりっぱな建物や仏像が、この時に失われました。1953年(昭和28)、奥宮の社殿(しゃでん)は、鳥取県指定保護文化財となり、その後、国の重要文化財になりました。

⑧

探検！探検！ 調べてみよう！

○阿弥陀堂（あみだどう）夏山登山道を少し登ってから右折。国の重要文化財。

蓮浄院（れんじょういん）志賀直哉が『暗夜行路』を書いた宿坊（しゅくぼう）。

洞明院（どうみょういん）このあたりは西明院の僧坊（そうぼう）のあったところ。

○大山寺本堂（だいせんじほんどう）博労座から真っ直ぐ登る。むかしの大日堂跡。

なで牛（宝牛・たからうし）…大きな牛の銅像。なでると願いをかなえてくれる。

がしん地蔵 天保（てんぼう）の大ききんで死んだ人をとむらうために建てられた。

信濃坊源盛の碑（しなのぼうげんせい）船上山合戦で活躍した名和長年の弟の碑。

弘化の石地蔵（こうかのいしじぞう）2.4mもある石造。江戸末期のお地蔵様。

蓮華の手水鉢（れんげのちょうずばち）田植歌にも唄われたほど有名な手を洗う鉢。

○大神山神社奥宮（おおがみやまじんじゃおくのみや）大山寺本堂横を登ったところ。

石鳥居（いしのとりい）米子の豪商・鹿島家の寄進。すぐ前には石灯籠もある。

吉持地蔵（よしもちじぞう）長者原の開拓者で南部町の豪農だった吉持家の寄進。

烏栖佐摩明王像（うすさまみょうおうどう）不浄を除くという意味の守護神。

大納言杉（だいなごんすぎ）金門の南側。なまけ者の僧を天狗がしばりつけた大杉。

道案内は
まかせなさい



阿弥陀堂



吉持地蔵